

III. 堺市の維持向上すべき歴史的風致

堺市の地形は、南部の丘陵地から海へと向かって緩やかに変化している。この大きな地帯構造が、各時代における人々の活動の場を規定し、市街地の形成に大きな影響を与えてきた。古代より海に開かれた堺は、中世以降環濠都市として、そして近代以降も港湾都市として、海を通じて広く世界へと繋がる流通往来の拠点として発展を続けた。

さらに地形に即して整備された複数の街道の基点や結節点として、陸路においても流通往来の拠点となっており、人・物・情報が集まり、各時代に新しい文化を生みだしてきた。また丘陵部においても、中世荘園としての発展、近世の豪農を中心とした集落における綿花などの商品作物栽培などによる発展を経て、近代以降は都市化が進み、広く市街地が形成されてきた。

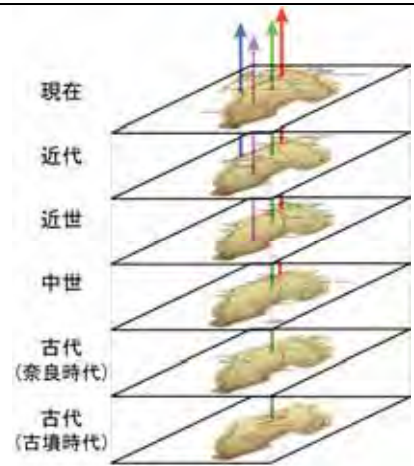
このような歴史的背景を受けて、現在の堺市は、堺旧港や環濠都市を含む都心、百舌鳥古墳群やその周辺の伝統ある市街地、街道集落、浜寺や大美野に代表される近代近郊の開発地、泉北ニュータウンなどの郊外住宅地と農村集落、里山の豊かな自然が残る南部丘陵地、高度経済成長期を支え今また都市再生が進む臨海市街地など、地域ごとに多様な特徴を有している。



堺市の地域別特性

これらの多様な市街地において、茶の湯、線香製造、海濱行楽地開発などの各時代に新しい文化を取り入れながら地域の人々により洗練されてきた活動、だんじりやふとん太鼓などの地域の祭礼などが展開している。これらの伝統を反映した人々の活動は、一部は形を変えつつも、地域の人々の手により継承され、市全域にわたり、歴史的風致が重層をなして形成されてきた。

- ・堺の地帯構造に即して、各時代に形成されてきた建造物が現在も良好に残る。
- ・各時代を起源とした伝統産業や祭礼などの人々の活動が展開、また継承され、市全域にわたり、重層的な歴史的風致が形成されてきた。
- ・各時代において百舌鳥及び環濠都市を核とし、周辺の歴史文化が醸成されてきた。
- ・そのほか、近世に近郊集落で発展した祭礼・行事、近代に海浜部で発展した海濱行楽が特徴的である。

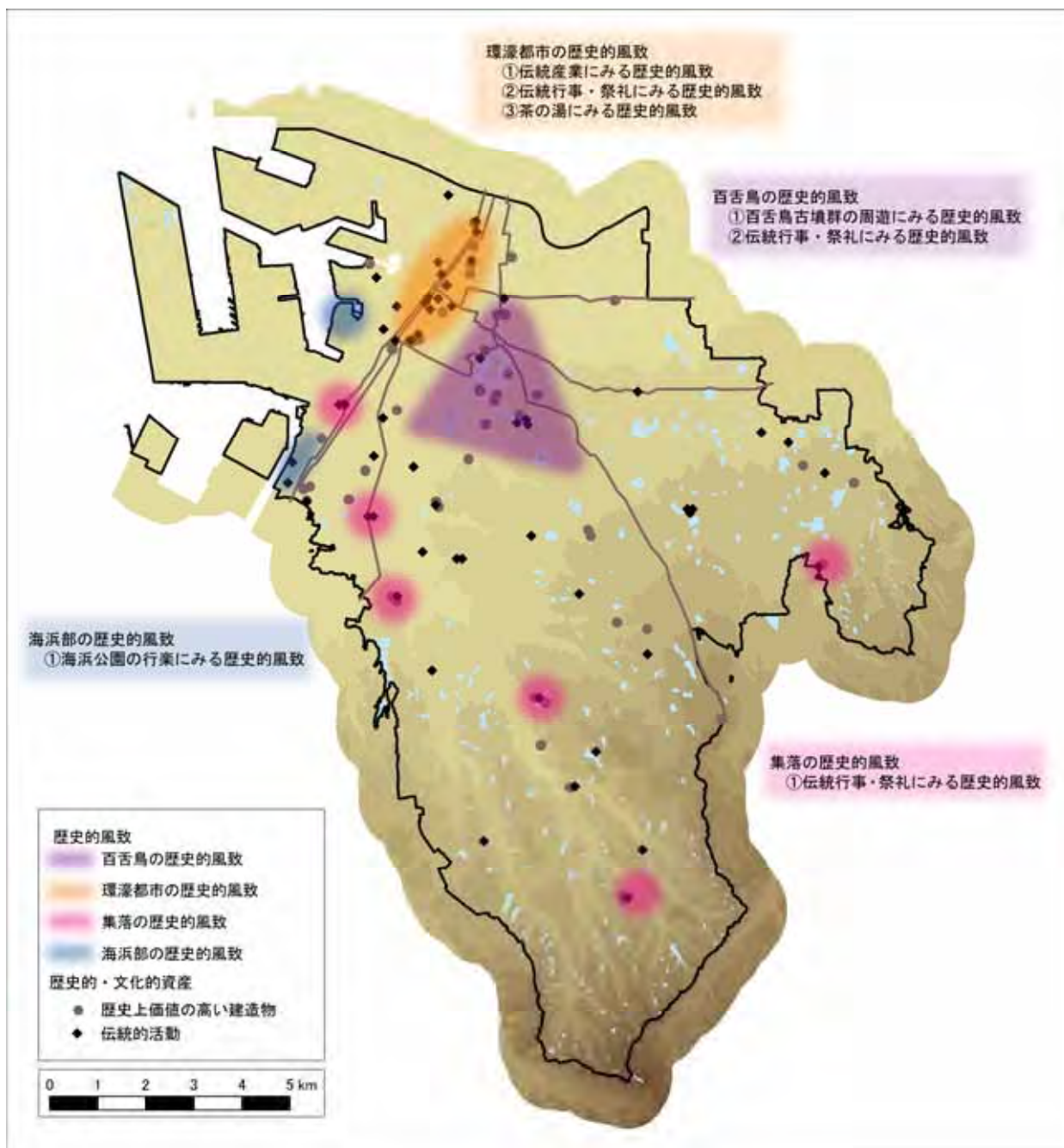


堺市の歴史的風致の成り立ち

古代を起源とする百舌鳥の歴史的風致、中世を起源とする環濠都市の歴史的風致が、それらの周辺の歴史文化の醸成にも大きな影響を与えてきた。さらに、近世に近郊集落で発展した祭礼・行事、近代に海浜部で発展した海濱行楽も、様々な時代を起源とする堺市の歴史的風致の特性を代表する、特徴的な歴史的風致となっている。

そのため堺市における歴史的風致は以下の4つに整理する。

- (1) 百舌鳥の歴史的風致
- (2) 環濠都市の歴史的風致
- (3) 集落の歴史的風致
- (4) 海浜部の歴史的風致

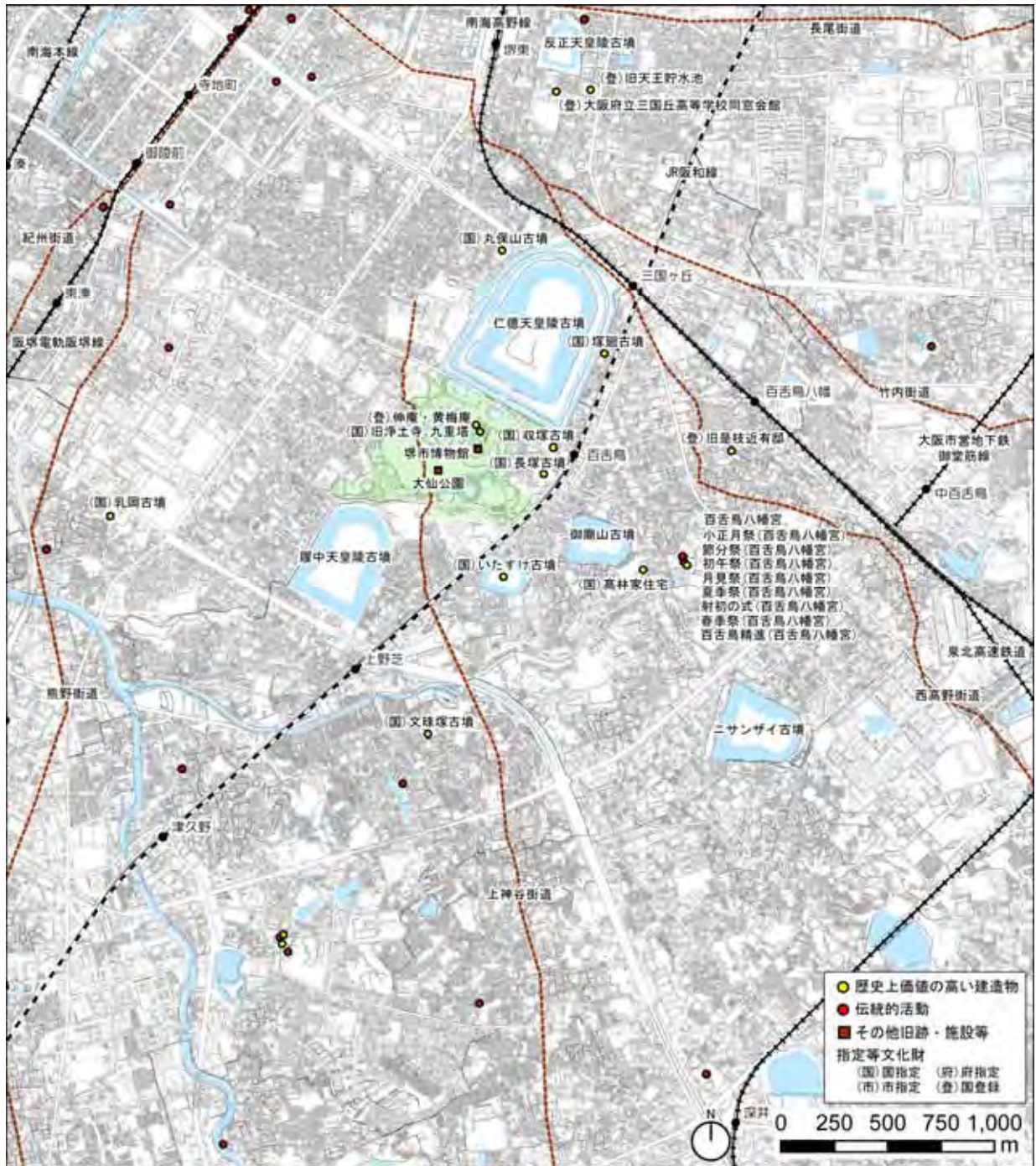


堺市における歴史的風致

1. 百舌鳥の歴史的風致

百舌鳥古墳群は、仁徳天皇陵古墳をはじめとする巨大な古墳がまとまって築かれており、東方約10kmにある古市古墳群とともに日本を代表する古墳群である。この地に巨大古墳群が築かれたのは、海上から河内平野や大和盆地とを結ぶルートの発着点であったことが最大の理由とされている。

百舌鳥古墳群は、大阪湾を望む台地の上に築かれ、4km 四方の範囲に広がっている。この範囲は、日本書紀には「百舌鳥野」や「百舌鳥耳原」と記されており、古代以来の名を継ぐ地名として、現在に至るまで「百舌鳥」の名は生き続けている。



「百舌鳥の歴史的風致」における歴史上価値の高い建造物と伝統的活動など

百舌鳥古墳群における古墳の造営は、4世紀末(古墳時代中期初頭)に始まり、6世紀後半頃(古墳時代後期後半)まで続き、その間に100基を越える古墳が築かれた。この5世紀を中心とする時代は、しばしば巨大古墳の世紀とも呼ばれ、前方後円墳が最も巨大化する時期でもあり、墳丘の長さが150m程度以上のものは大型と呼べる部類に入る。百舌鳥古墳群にはそのような大型前方後円墳が8基もあり、なかでも仁徳天皇陵古墳や履中天皇陵古墳、ニサンザイ古墳は、日本有数の規模を誇る巨大前方後円墳である。

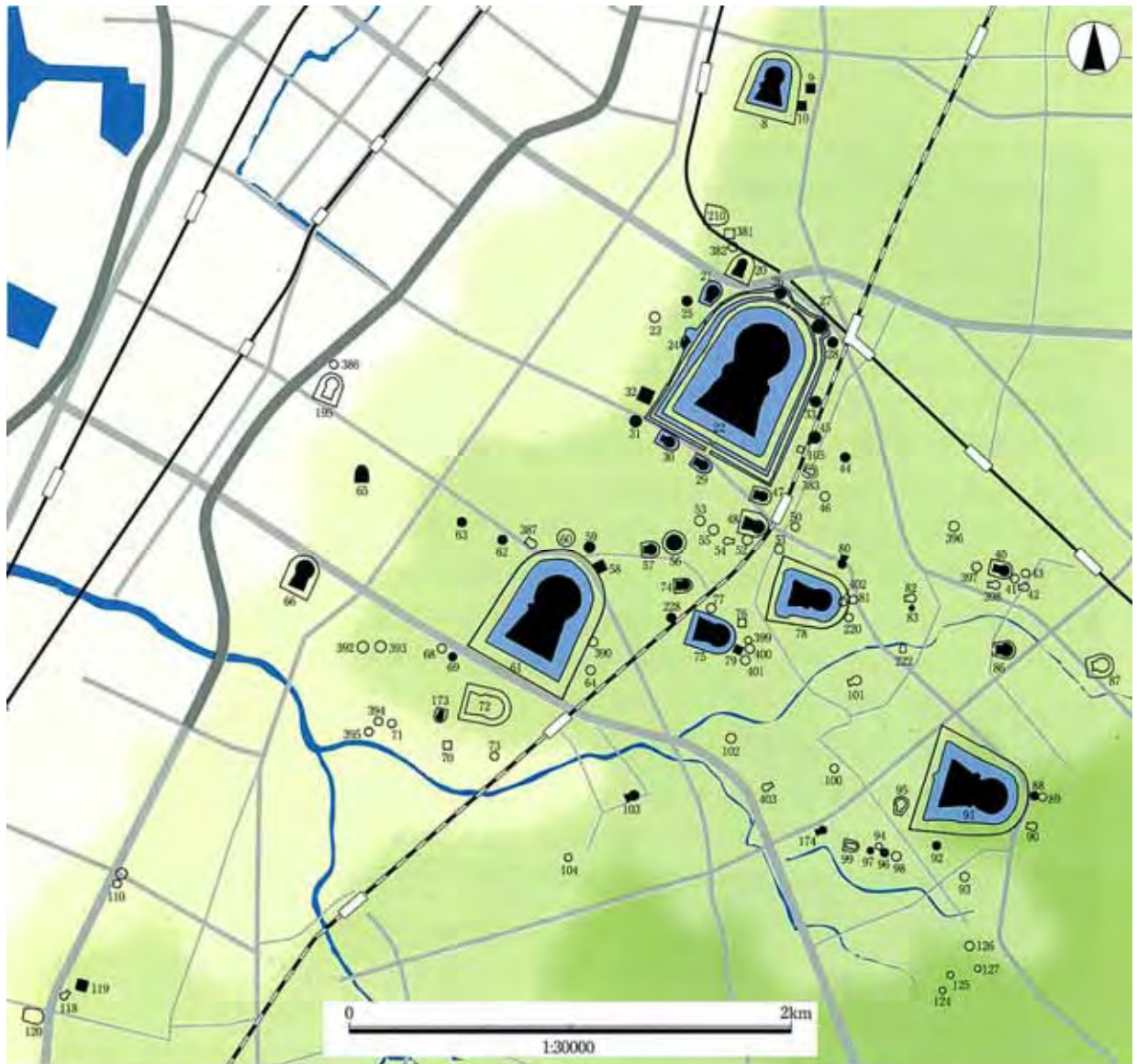
これらの古墳の築造にあたっては、当時の最高水準の土木技術が用いられ、また多くの人が動員された。古墳群の周囲には、浅香山遺跡、大仙中町遺跡、東上野芝遺跡、百舌鳥陵南遺跡、土師遺跡などの集落跡が点在しているが、これらは古墳築造に関わった人々の居住地、また副葬品や埴輪、工具などの生産拠点であったとされている。また、埴輪や様々な副葬品の生産には専門集団である土師部のかかわりが指摘されており、現在も百舌鳥古墳群の域内に土師(現在の中区土師町)の地名が残されている。

百舌鳥古墳群の大型古墳は、築造の後、平安時代になっても墳墓として認識されており、延長5年(927)の『延喜式』諸陵寮に仁徳天皇陵古墳を「百舌鳥耳原中陵」と記されている。また、正治2年(1200)の諸陵雑事注文では、仁徳天皇陵古墳に供物をおく記述がみえる。この頃、百舌鳥古墳群周辺において耕地開発が行われ、古墳の濠をため池や耕作地に改変している。反正天皇陵古墳の外濠は、発掘調査の結果鎌倉時代(13世紀頃)に埋められ、耕作地としていたことを確認している。

中世には、石清水八幡領の荘園である「万代庄」が存在する。百舌鳥古墳群内に位置する百舌鳥八幡宮は、山城石清水八幡宮の末社としての「万代別宮」に比定されており、社領管理をしていたとされている。



仁徳天皇陵古墳



- | | | | |
|------------|----------------|---------------|------------------|
| 8 反正天皇陵古墳 | 52 狐塚古墳 | 81 カンボ山古墳 | 125 ハナシ山古墳 |
| 9 天王古墳 | 53 鹿塚古墳 | 82 万代寺山古墳 | 126 土山古墳 |
| 10 鷲山古墳 | 54 茂右衛門山古墳 | 83 鎮守山塚古墳 | 127 ギンバ山古墳 |
| 20 赤山古墳 | 55 原山古墳 | 86 定の山古墳 | 173 かぶと塚古墳 |
| 21 丸保山古墳 | 56 タワシヨウ坊古墳 | 87 尾塚古墳 | 174 飛鳥山古墳(坊主山古墳) |
| 22 仁徳天皇陵古墳 | 57 旗塚古墳 | 88 聖塚古墳 | 195 長山古墳 |
| 23 一本松古墳 | 58 寺山南山古墳 | 89 聖の塚古墳 | 210 榎古墳 |
| 24 藤の谷古墳 | 59 七観音古墳 | 90 経塚古墳 | 220 百舌鳥赤畑町1号墳 |
| 25 狐山塚古墳 | 60 七観音古墳(七観音墳) | 91 ニサンサイ古墳 | 222 百舌鳥梅町南跡 |
| 26 茶山古墳 | 61 國中天皇陵古墳 | 92 舞台塚古墳 | 228 東上野芝町1号墳 |
| 27 大安寺山古墳 | 62 東酒倉古墳 | 93 ツタチ山古墳 | 381 無名塚1号墳 |
| 28 源右衛門山古墳 | 63 西酒倉古墳 | 94 ドンチャン山1号墳 | 382 無名塚2号墳 |
| 29 孫太夫山古墳 | 64 狐塚古墳 | 95 こうじ山古墳 | 383 備塚古墳 |
| 30 竜佐山古墳 | 65 槍塚古墳 | 96 ドンチャン山2号墳 | 386 無名塚6号墳 |
| 31 狐山古墳 | 66 乳岡古墳 | 97 正徳寺山古墳 | 387 無名塚7号墳 |
| 32 辨龜山古墳 | 68 塚塚古墳 | 98 文山古墳 | 390 石塚古墳 |
| 33 塚塚古墳 | 69 経堂古墳 | 99 平井塚古墳 | 392 無名塚12号墳 |
| 40 御懸表塚古墳 | 70 上野芝町1号墳 | 100 磯の山古墳 | 393 狐塚古墳 |
| 41 貴仁山古墳 | 71 上野芝町2号墳 | 101 城ノ山古墳 | 394 無名塚14号墳 |
| 42 波矢古墳 | 72 大塚山古墳 | 102 赤山古墳 | 395 無名塚15号墳 |
| 43 木下山古墳 | 73 亀塚古墳 | 103 文珠塚古墳 | 396 無名塚16号墳 |
| 44 坊主山古墳 | 74 鏡塚古墳 | 104 黄金山塚古墳 | 397 無名塚17号墳 |
| 45 殿塚古墳 | 75 いたすけ古墳 | 105 百舌鳥夕雲町1号墳 | 398 無名塚18号墳 |
| 46 鏡塚古墳 | 76 香呂茂塚古墳 | 110 高月1号墳 | 399 無名塚19号墳 |
| 47 殿塚古墳 | 77 播磨塚古墳 | 118 赤山古墳 | 400 無名塚20号墳 |
| 48 長塚古墳 | 78 御嶺山古墳 | 119 塔塚古墳 | 401 無名塚21号墳 |
| 50 八幡塚古墳 | 79 青右エ門山古墳 | 120 経塚古墳 | 402 無名塚22号墳 |
| 51 一本松塚古墳 | 80 万代山古墳 | 124 七郎館古墳 | 403 ナゲ塚古墳 |

百舌鳥古墳群分布図

近世には、寛政年間(1624~1644)に堺代官高西夕雲と筒井庄右衛門による新田開発である「夕雲開」に代表されるように、百舌鳥古墳群周辺において耕作地が拡大し、生産高の向上がなされている。また、寛文2年(1662)には、狭山池の水が仁徳天皇陵古墳の濠まで引かれ、大仙陵池として堺廻り4か村の灌漑用水として利用されていた。この大仙陵池は、重要な水の供給源であり、江戸時代には水の配分を巡って植え付け時期について争いが起こっていた。古墳の濠に湛えられた水は、近代以降から戦後に至っても近隣の田畑を潤していたが、現在は、市街地開発や道路をはじめとした交通網の整備により用水の大半が遮断され、灌漑としての環境は失われつつある。



仁徳天皇陵古墳の遠望写真(昭和6年(1931)8月)

このように、中世以降において、周辺住民による古墳への意識は、墳墓と、耕作における水の供給源の二面性を有していた。

近代以降は、土地区画整理事業や耕地整理事業を活用した開発が実施され、古墳の周辺において住宅地が形成された。戦後には住宅開発でいくつかの古墳が失われたが、いたすけ古墳が破壊の危機に瀕した際には、市民を中心とした保存運動がおり、国の史跡として保存された。

昭和42年(1967)からは大仙公園の整備が進められ、昭和55年(1980)の堺市博物館建設、2棟の茶室(伸庵、黄梅庵)の寄贈、移築が行われた。公園内には古墳が点在し、さらに、周辺の住宅地にも古墳が残されており、緑地としての良好な景観をなしている。

百舌鳥古墳群の周遊にみる歴史的風致

近世以降に周遊の対象となった百舌鳥古墳群には、現在47基の古墳が残されている。

堺市内に位置する天皇陵は、延喜式に、仁徳天皇の陵を百舌鳥耳原中陵、履中天皇の陵を百舌鳥耳原南陵、反正天皇の陵を百舌鳥耳原北陵と記しており、近代以降はこれらを三陵と称している。

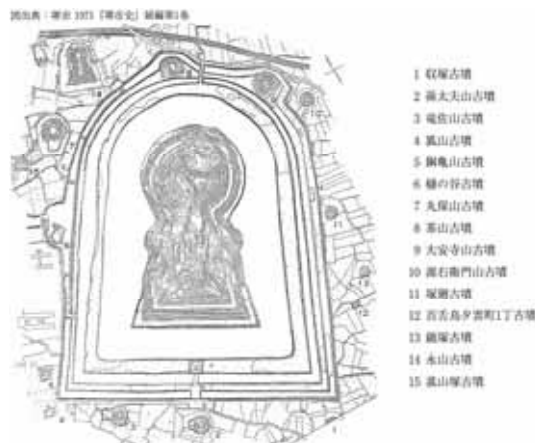
仁徳天皇陵古墳は、日本最大の前方後円墳であり、墳丘の全長約486m、後円部の高さ約35.8mを測る。出土した埴輪や須恵器の特徴から、築造時期は5世紀中頃である。墳丘は三段に築成され、側面のくびれ部に造出しをそなえ、三重の濠をめぐらしている。明治5年(1872)に前方部で堅穴式石室が見つかり、刀剣、甲冑、ガラス製品が出土している。これらは再び埋め戻されたものの、当時の絵図により石棺の形状のほか、庇付きの冑や金銅装の鋳留めの短甲が出土したといった詳細な記録が残されている。また、宝暦7年(1757)年にまとめられた『全堺詳志』の「陵墓部 仁徳帝陵」の項に「御廟ハ北峰ニアリ、石ノ唐櫃アリ」と記され、当時は石棺もしくは堅穴式石室の蓋石が露出していたことがうかがえる。



仁徳天皇大仙陵石郭之中ヨリ出シ甲冑之圖

仁徳天皇陵古墳の周囲には、樋の谷古墳、茶山古墳、大安寺山古墳、源右衛門山古墳、狐山古墳、銅龜山古墳など、陪塚とされる10基以上の古墳が残っており、その中の収塚古墳、塚廻古墳、丸保山古墳に関しては国の史跡に指定されている。塚廻古墳では明治45年(1912)の発掘の際に、木棺が

発見されており、銅鏡2面や刀剣、多量の玉類が出土している。埴輪の特徴から仁徳天皇陵古墳と同じ時期の築造であり、陪塚の内部を知ることができる貴重な古墳である。また、収塚古墳は、墳丘の全長約61m、後円部の高さ約4.2mを測る二段築成の前方後円墳である。前方部は既に削平され、後円部のみ残されており、周囲には盾形の周濠が巡る。埴輪の特徴から、仁徳天皇陵古墳と同じ時期の築造である。仁徳天皇陵古墳の南西隅に接して築かれた銅亀山古墳は、陪塚の中で唯一の方墳であり、一辺約26mを測る。



仁徳天皇陵古墳とその陪塚

履中天皇陵古墳は、墳丘の全長約365m、後円部の高さ約27.6mの前方後円墳である。墳丘は三段に築成され、西側のくびれ部には造出しをそなえる。現在盾形の周濠と堤が巡っているが、かつてはその外側にも濠が巡っていた。出土した埴輪の特徴から、仁徳天皇陵古墳に先立つ、5世紀前半の築造である。



履中天皇陵古墳

履中天皇陵古墳の北側には、陪塚とされる七観音古墳、寺山南山古墳が残る。七観音古墳からは、かつて琴柱形石製品が出土したと伝えられている。寺山南山古墳は、一辺が40m以上を測り、二段に築成された方墳である。平成22年(2010)度を実施した発掘調査の結果、一段目の埴輪列の長さがそれぞれ33.5m、30.5mを測ることから、古墳の平面形が長方形であることを確認した。墳丘の周囲には濠をめぐらしているが、南西側は履中天皇陵古墳の外濠と一体になっている可能性が高く、密接な関係をもつ陪塚といえる。埴輪や須恵器の特徴から、履中天皇陵古墳と同じ時期の築造である。なお、寺山南山古墳の西側にはかつて七観音古墳が存在していた。



反正天皇陵古墳

反正天皇陵古墳は、百舌鳥古墳群の北端に位置し、墳丘の全長約148m、後円部の高さ約14mを測る。墳丘は三段に築成され、西側のくびれ部には造出しをそなえる。現在盾形の周濠と堤が巡っているが、その外側にも濠が巡っていた。出土した埴輪の特徴から、5世紀後半でも古い段階の築造である。西側には陪塚とされる天王古墳と鈴山古墳が位置している。



乳岡古墳 石棺

乳岡古墳は、国の史跡に指定されており百舌鳥古墳群の西端に位置する。前方部の大半が削平され住宅地となっているが、墳丘長約155m、後円部の高さ約14mを測る三段

築成の前方後円墳である。昭和 47 年(1972)の発掘調査により後円部中央で粘土に覆われた長持形石棺を確認した。この際、石棺を覆っていた粘土から鋤形石や車輪石などの碧玉製石製品が出土した。石棺の型式や碧玉製石製品の出土から、築造時期は 4 世紀末であり、百舌鳥古墳群において最初に造られた大型前方後円墳である。

いたすけ古墳は、墳丘の全長約 146m、後円部の高さ約 12.2mを測る。墳丘は三段に築成され、南側のくびれ部には造出しをそなえる。現在も盾形の周濠が残されており、南側には堤が築かれている。出土した埴輪の特徴から 5 世紀中頃の築造である。昭和 30 年(1955)頃に、宅地開発の計画が上がった際に市民を中心とした保存運動によって破壊をまぬがれ、国の史跡として保存された。その際に後円部から出土した衝角付冑形埴輪は、堺市の文化財保護のシンボルとなり、平成 13 年(2001)には市の有形文化財となった。なお、東側に位置する善右エ門山古墳はいたすけ古墳の陪塚とされる。二段築成の方墳であり、埴輪や須恵器杯の特徴から、いたすけ古墳と同じ時期の築造である。

長塚古墳は、墳丘の全長約 102m、後円部の高さ約 8.2mを測る前方後円墳である。墳丘は三段に築成され、南側のくびれ部には造出しをそなえる。周囲には盾形の周濠が巡る。埴輪の特徴から 5 世紀中頃から後半の築造であり、国の史跡に指定されている。



衝角付冑型埴輪

御廟山古墳は、墳丘の全長 200m以上、後円部の高さ約 18.3mを測る前方後円墳である。現在は百舌鳥陵墓参考地となっている。墳丘は三段に築成され、南側のくびれ部には造出しをそなえる。現在盾形の周濠と堤が巡っているが、その外側にも濠が巡っていた。平成 20 年(2008)度に宮内庁との同時調査が実施され、造出しから祭祀に用いられた土製品とともに蓋形埴輪などの形象埴輪が大量に出土した。なかでも、内部に冢形埴輪を配置する日本最大規模の冢形埴輪が出土した。



長塚古墳 平面図

これは、造出し部分での祭祀を考える上で貴重な資料である。埴輪の特徴から、築造時期は 5 世紀中頃である。また、御廟山古墳の東側には陪塚とされるカトンボ山古墳が存在していた。



御廟山古墳

ニサンザイ古墳は、墳丘の全長約 290m、後円部の高さ約 24.6mを測る前方後円墳である。墳丘は三段に築成され、両側のくびれ部には造出しをそなえる。現在盾形の周濠と堤が巡っているが、その外側にも濠が巡っていた。出土した埴輪の特徴から 5 世紀後半の築造であり、百舌鳥古墳群では最も新しい大型前方後円墳である。現在は東百舌鳥陵墓参考地となっている。北側に位置する聖塚古墳は、ニサンザイ古墳の陪塚とされていたが、平成 21 年(2009)度に行われた発掘調査の結果、外濠の堤の高まりを留めたものであった可能性が高まった。



ニサンザイ古墳

旗塚古墳は、墳丘の全長約 53.8m、後円部の高さ約 3.8mを測る前方後円墳である。墳丘は二段に築造され、南側のくびれ部には造出しをそなえる。発掘調査の結果、一段目に並べられた円筒埴輪列の前面に形象埴輪を配置したことを確認した。また、造出しでは、器財形埴輪や人物、動物形埴輪などの形象埴輪が大量に出土した。埴輪の特徴から、築造時期は 5 世紀中頃である。

旗塚古墳の周辺には、銭塚古墳、グワショウ坊古墳、東上野芝町 1 号墳が位置する。なかでも、グワショウ坊古墳は直径約 61mの大型の円墳である。墳丘の大半が削平されているが、平成 20 年(2008)に行われた発掘調査の結果、ブロック状の土砂を積み上げて墳丘を構築する様子を確認することができた。

文珠塚古墳は、百舌鳥川を挟んだ南側の丘陵に位置しており、墳丘の全長約 58m、後円部の高さ約 5mを測る前方後円墳である。古墳の周には濠が無く、後円部側に掘割りが設けられている。埴輪の特徴から 5 世紀代の築造であり、国の史跡に指定されている。

定の山古墳は、墳丘の全長約 69m、後円部の高さ約 7mを測る前方後円墳である。古墳の周には濠を巡らしており、発掘調査の結果、埴輪や須恵器、木製品が出土している。埴輪の特徴から、築造時期は 5 世紀後半である。



定の山古墳

御廟表塚古墳は、墳丘の全長約 75m、後円部の高さ約 8mを測る前方後円墳だが、既に前方部は削平されている。墳丘は二段に築成されており、周囲には濠を巡らしている。埴輪の特徴から、築造時期は 5 世紀後半である。

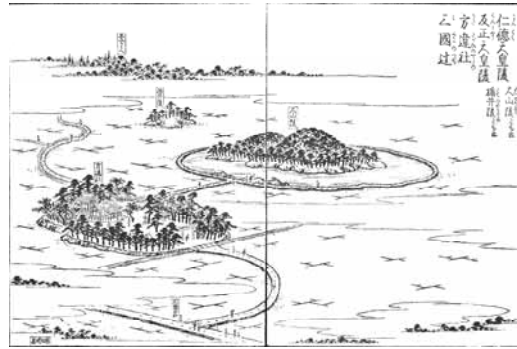
なお、東側に接して、堺の豪商であり、地主であり、庄屋であった筒井家の屋敷がある。近世には、新田開発である夕雲開を行っており、百舌鳥古墳群での農地開発を主導していた。筒井家の屋敷は、東西約 70m、南北約 50mを測る。西、北、東と南の一部に環濠を備え、アプローチが折れ曲がることで、さながら戦国の居館の構えを示し、開拓土豪の面影をみせている。母屋は古絵図の記録から、延宝年間以後の建築とされる。また、敷地内には樹齢 800 年以上とされるクスの古木があり、大阪府の天然記念物に指定されている。



百舌鳥のくす(筒井家)

ドンチャン山 2 号墳と正楽寺山古墳は、ともに直径 20m程の円墳で、埴輪を伴わない。出土した須恵器から、大型前方後円墳の築造を終えた 6 世紀前半以降の築造である。

百舌鳥古墳群において、古墳を外から眺める周遊の対象として注目されるようになるのは、近世以降のことである。江戸時代になると、貞享元年(1684)に刊行された『堺鑑』において、「仁徳天皇陵」、「菟道太子陵(現反正天皇陵)」、「武内宿禰墓(現長塚古墳)」についての項目があり、被葬者や古墳の大きさについて紹介されているように、近代以前から様々な文書にその記述がみられる。特に、寛政 8 年(1796)に刊行された名所案内である『和泉名所図会』に「仁徳天皇陵」として紹介されているように、当時から名所として観光の対象として認識されていたことがみてとれる。またその挿絵には、濠の周囲を巡る道から見物する様子が描かれており、人々が古墳をその傍から見物していたことがわかる。なお、『和泉名所図会』には、陵の大きさや延喜式について触れているが、内部の様子は記述



和泉名所図会
 (下図は仁徳天皇陵古墳を拡大したもの)

されていないことから、挿図のとおり、人々は濠から巨大な墳墓を眺めることでその大きさを体感していた。

また、百舌鳥古墳群は短歌にも詠まれ、僧・国学者である契沖(1640～1701)の「山とのみ見ゆるもす野のみささぎに高津の宮の昔をそおもふ」、伴林光平(1813～1864)「凧に駄がねさえし耳原の御陵の松もかすむ春かな」などが代表的な作品として広く知られている。

近代になると、仁徳天皇陵古墳、反正天皇陵古墳、履中天皇陵古墳の三陵を名所として各種案内に記載されるようになり、同時にこの頃皇陵参拝がグループもしくは個人により盛んに行われるようになり、古墳群周遊が広く一般的に行われるようになった。

大正 10 年(1921)鉄道省発刊の『鉄道旅行案内』には、名所として「仁徳天皇陵」の項目があげられている。また、昭和 3 年(1928)堺市役所発行の『堺市案内記』において、三陵についての記述があり、陵を訪れる際の最寄り駅も紹介されていた。当時は、宿院駅から古墳群へと向かう乗合自動車が運行されていた。

さらに昭和 3 年(1928)発行の『近畿行脚』では、反正天皇、仁徳天皇、履中天皇の陵の紹介並びに、見学順路(堺東駅→反正帝陵→仁徳帝陵→百舌鳥八幡宮→百舌鳥八幡駅(行程 6 キロ))を記載している。このように、古墳群を周遊する形式の観光スタイルが一般的になってきたことがわかる。昭和 10 年(1935)には、吉田初三郎が描いた鳥瞰図に、「百舌鳥耳原の三御陵」が描かれ、裏面の堺名勝史跡案内に、案内文が載せられているなど、観光地図による案内も盛んとなっていた。



吉田初三郎「堺市鳥瞰図」(一部)

また近代以降においても、百舌鳥古墳群は俳句、短歌、川柳の題材となり、高浜虚子「町人の寄付の櫻や御陵道」(昭和4年(1929))、北原白秋「百舌鳥耳原の中の陵群鴨の御濠に見えて春は未だし」(昭和12年(1937))などが代表的な作品として広く知られている。

古墳群周遊が広く一般的に浸透する中で、周辺区域の整備も進められきた。大正13年(1924)には、仁徳天皇陵古墳南側の御陵道が、昭和天皇(当時皇太子)御成婚記念事業として整備された。この際には、堺、泉北郡の青年団他の勤労奉仕や、堺市民有志の寄付による桜や松の植樹が行われた。

さらに、大正年間から昭和初年にかけて堺東駅前、百舌鳥駅前(現在は長塚古墳の東端に移設)、御陵通に、それぞれ百舌鳥三陵への行き先を記した石碑を樹立し、各駅から三陵への案内表示がなされた。さらに、戦後においても仁徳天皇陵古墳の北側の国道310号線沿いに仁徳天皇陵古墳への参道を案内する石碑が建立された。

現在も、百舌鳥古墳群およびその周辺の大仙公園には、日本全国から多くの人々が訪れている。仁徳天皇陵古墳には、平成22年(2010)4月から翌年3月までの一年間で13万人もの人々の来訪があった。また、平成20年(2008)に宮内庁と同時調査を行った御廟山古墳の現地公開では、2日間で6,376人が見学した。このように、市内はもちろんのこと、全国的な百舌鳥古墳群に対する関心の高さが伺える。さらに、観光ボランティア協会による百舌鳥古墳群の案内や、地域の人々を中心とした古墳清掃が継続して行われているなど、多くの人々が百舌鳥古墳群を大切に思い、これを支えている。

百舌鳥古墳群では三陵を中心とした古墳を対象に、近世から現在に至るまで日本各地から人々が訪れている。人々の眼前には、山のような古墳がそびえ、背後には古墳が点在する景観が広がっている。



御陵通



標柱石(堺東駅前)



ボランティアによるガイド